高等小學

國語讀本

五

375.9
Ni19
資料室

30276
教科書文庫
3
810
32-1901
2000301402

375.9
N119

明治三十四年九月十三日文部省檢定濟

高等小學校國語科兒童用

高等小學國語讀本

伯爵副島種臣閲
伯爵東久世通禧閲
西澤之助編

東京
國光社藏版

廣島大學
教
33390
文

室料資

高等小學國語讀本五

目次

第一課　聖德（一）　五
第二課　聖德（二）　七
第三課　我ガ國ノ風光　十
第四課　海底ノ光景　十四
第五課　氣候及產物（一）　十七
第六課　氣候及產物（二）　二十

第七課　中村直三　二十二
第八課　印度　二十八
第九課　英吉利と獨逸　三十一
第十課　鑄物　三十九
第十一課　奈良の朝　四十九
第十二課　陶器　四十二
第十三課　加藤景正　四十五
第十四課　心身の休養　四十八

第十五課　夏の樂　五十
第十六課　沙原の旅　五十五
第十七課　空氣ト水　六十
第十八課　資本　六十四
第十九課　銀行　六十七
第二十課　晴雨計　七十
第二十一課　橋本五郎右衛門　七十四
第二十二課　海上の事業　七十八

第二十三課　濱田彌兵衛　八十
第二十四課　我ガ國ノ武威　八十六
第二十五課　み國のはしら　八十八

高等小學國語讀本五

伯爵　東久世通禧　閲
伯爵　副嶋種臣　閲
西澤之助　編

第一課　聖德（一）

畏多けれども、今上天皇陛下には、聖明英武にまし〳〵て、夙に、先皇の御志を承けて、大政を、古に復し給ひ、封建を廢して、郡縣とし、諸般の弊風をも改め給へり。

殊に、孝敬の御心篤くましくして、皇祖皇宗の神靈を尊ばせ給ひ、伊勢大神宮、畝傍山の御陵等に行幸し給ひて、親しく、大孝をのべたまへり。又、常に、深く、臣民をいつくしみ給ひて、代々の忠臣にも、贈位を賜ひ、孝子義僕をあらはして、大に、教化を施し給ひ、更に、教育勅語を下し、我等臣民をして、したがひ由る所を知らしめ給へり。

謹みて、御製の大御歌を拜しまつるに、

いにしへの書みるたびに思ふかな
おのがをさむる國はいかにと

御國をおぼし、民を憐ませ給ふ御心の深くましますは、眞に、天地と、其の德をひとしくし給へりと申し奉るべし。

第二課　聖德（三）

明治の初、東京に遷らせ給ひしに、程なく、皇宮炎上ありしかば、假に、赤阪の離宮を、皇居と定め給ひき。其の頃、太政大臣三條實美、御

造營の議を奏し奉れるを、國用多端の折なればとて許させ給はず。さる程に、大宮は、所々破れて、椽さへ朽ちたりしかば、更に、繕はんことを奏し奉れるに、雨露を支ふるに足れば可なりと宣ひて、許し給はざりき。

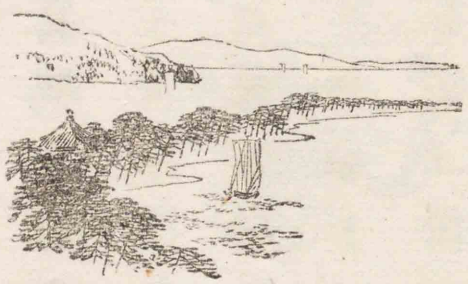
尚、國家の強盛を圖らせ給ふ大御心より、皇太后宮の御所の外、すべて、宮中の經費を省かせ給ひ、日々の供御をさへ節し給ひて、毎年、三十萬圓を下して、軍艦製造費を補はしめ給へり。

又、陸海軍大演習の時は、親しく臨ませ給ひて、將校士卒を勵し給ふ。嘗、下總の習志野(ナラシノ)に、陸軍の演習ありしとき、暴雨にぬれさせ給ひながら、御馬を、陣頭に立て給ひて、軍隊の操縱をみそなはしき。又、征清の役には、大本營を、廣嶋に進め給ひて、日夜、軍政をきこしめし、寒さ烈しき冬の朝、兵士の服を召させ給ひて、遙に、外征將卒の寒苦を思しやらせ

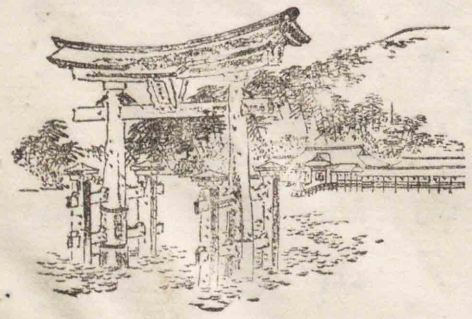
給ひき。聖德の廣大なること、誠に、限もおはしまさず。

第三課　我ガ國ノ風光

松嶋、天橋立、嚴嶋ハ、日本三景ト稱セラレテ、風光ノ秀麗ナルコト、海内無双ナリ。此ノ外、三保ノ松原、和歌浦、須磨、明石ナドハ、白沙青松連リテ、蒼波ト相映ジ、松風、濤聲ト相和シテ、言フベカラザル趣アリ。



瀬戸ノ内海ハ、風靜ニシテ、波起ラズ、兩岸ノ景色、描ケルガ如ク、淡ク霞メル嶋々ノ樣面白シ。琵琶湖ノホトリニハ、近江八景トテ、唐崎ノ夜雨、比良ノ暮雪、石山ノ秋月、三井ノ晩鐘、堅田ノ落雁、矢走ノ歸帆、粟津ノ晴嵐、勢田ノ夕照アリ。箱根山中ノ蘆湖、日光ノ幸湖等

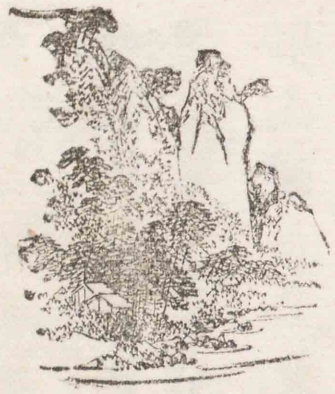


ノ如キモ、風景、甚絶佳ナリ。又、畿内ニハ、嵐山、高雄、吉野、龍田等ノ勝地アリ。

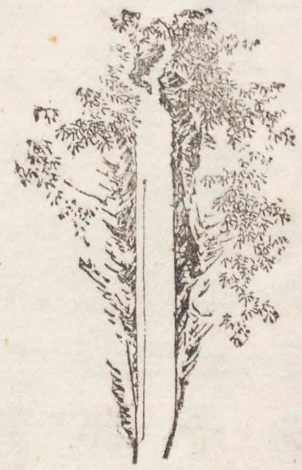
國内ニハ、火山質ノ山並ビ峙チタレバ、光景雄大ニシテ、眺望奇絶ナルモノ多シ。阿蘇山、霧嶋山、白山、立山、御岳、妙義山ノ如キハ、高ク、雲外ニ聳エ、殊ニ、富士山ハ、東海ノ表ニ屹立シテ、白雪、萬古、トクルコトナシ。

河流ノ急激ナルモノ、亦、隨ヒテ

多シ。一條ノ釣橋、岩ニ懸リテ、將ニ落チントスル處、岸ヲ蹶テ奔流スル富士川、球摩川ノ如キアリ。一雙ノ奇石直立シテ、將ニ崩レントスル處、銀河、天ヨリ落チテ飛ブ華嚴、



那智ノ瀧ノ如キアリ。豐前ノ耶馬溪、木曾ノ山中ノ如キハ、十里ノ深谿、天然ノ奇工ヲ盡シテ、此ノ世ノモノトモ思ハ



レズ。我ガ國人ノ、秀麗高雅ナル精神ニ富メルハ、自然ノ風景ノ然ラシムルニモヨルナルベシ。

第四課　海底ノ光景

我等ノ住ム陸地ノ表面ニハ、山岳アリ、原野アリテ、草木、花卉、其ノ間ニ繁茂シ、走獸、飛禽ヨリ、昆蟲ノ類ニ至ルマデ、其ノ間ニ棲息シ陸上ノ光景ハ、實ニ、千態萬狀ナリ。

然レドモ、是、タヾ、地球ノ表面ノ四分ノ一ニ過ギザルナリ。他ノ四分ノ三ハ、海洋ニシテ、其ノ水底ニモ、亦、山アリ、原アリテ、動物植物モ、其ノ間ニ蕃殖セリ。

海中ノ沙洲ハ、タトヘバ、原野ニシテ、暗礁ハ、卽、山岳ナリ。其ノ、更ニ高クシテ、巔ノ、水面ニ現レタルモノハ、卽、嶋嶼ナリ。

海底ノ光景ヲバ、コトヾクハ、見ルコトヲ得ザレドモ、淺キ處ハ、天氣ハレ、風ナギタル

日ニ、水中ヲスカシテ、明ニ見ルコトヲ得ベク、其ノ深キ處ニテモ、百尺以内ノ海底ニハ、潛水器ヲ用ヰテ降リ、容易ニ、之ヲ觀察スルコトヲ得ベシ。

此等ノ方法ニヨリテ、海底ヲ觀察スレバ、海水スキトホリテ、ミドリ色ニ見エ、奇巖怪石、其ノ間ニ散在シ、緑苔、紅藻繁茂シ、或ハ、魚類ノ游泳セル、或ハ貝類ノ匍匐セルナド、陸上ニテハ、見ルコトヲ得ベカラザル趣アリ。時

ニ、日光、水ニ入リテ、之ヲ照セバ、其ノ美觀、キハマリナシ。海底ハ、實ニ、一種ノ好花園トモイフベキナリ。

第五課　氣候及產物(一)

おゝよそ、地球上の氣候には、日光の直射すると、傾射するとによりて、寒熱の差生じ、赤道より、南と北とに進むにしたがひて、溫度、次第に減ず。

ゆゑに、地球の表面は、熱帶、溫帶、寒帶の三つ

に區別せらる。熱帶は、炎暑きびしくして、溫帶は、寒暖中和に、寒帶は、寒氣、甚つよし。然れども、同一帶の中にても、寒暑の差甚しきものあり。かのヒマラヤ山、或は、富士山のいたゞきに、年中、積雪あるが如く、土地の高低は、また、氣候に、寒熱の差を生ぜしむるものなればなり。故に、夏日、高山に登らば、一日にして、四時の變化を試むるを得べし。

その他、風と、洋流とは、亦、氣候に、大なる關係

を及すものなり。英國の如きは、我が北海道よりも、緯度の高きところにあれども、メキシコ灣よりの暖流、海岸を洗ひ、大西洋の溫氣を含める海風の、寒氣を和ぐるが故に、氣候、頗溫暖なり。

我が國は、地形、西南より、東北に延び、南は、夏至線を超え、北は、北極圈を距ること遠からずして、熱帶、溫帶、寒帶の氣候を包含したれば、我が國の氣候を知らば、世界の氣候をも

察し得べきなり。

文法　漢語、及、名詞ノ、動詞トナルトキハ、佐行變格ノ爲ヲツヘテ活カス。例ヘバ、達、心ナドイフ語ノ、達せ、達し、達す、達する、達すれ、達せよ、心せ、心し、心すナドナルガ如シ。

第六課　氣候及産物（二）

氣候の寒熱は、産物の種類に、大なる影響を及すものなり。

熱帯地方は、生物繁くして、且大なり。植物は、雨露と温熱との助によりて、盛に成長蕃殖し、年中、しぼむことなし。棉花、藍、珈琲、砂糖、米、甘藷の如き農産物、黒檀、白檀等の良材、鳳梨（アナナス）、芭蕉、椰子等の果實多し。

獣類には、獅、虎、豹の如き、恐るべきもの、象の如き、大なるもの等あり。又、鱷（ワニ）、蛇、巨蟒（ウハバミ）の如き猛惡なる爬蟲類あり。鳥類には、羽毛美しき者多けれども、鳴禽類は、至りて稀なり。住民は、懶惰蒙昧にして、産業を勉めざれば、工藝品の見るべきものの少し。

寒帶地方は、年中、氷雪とくることなし。水禽海獸の外、陸上にては、矮小の灌木、および、蘚苔等の植物、白熊、馴鹿等の動物あるのみなり。住民は、漁獵を業として、生活をいとなむに過ぎず。

溫帶地方は、四時循環し、寒暑來往するが故に、寒熱二帶の動植物をも產して、生物の種類、極めて多し。

松、柏、楓、楡（ニレ）、山毛欅（ブナ）、橡、欖等成長し、米、麥、その他の穀類を始として、林檎、桃、梨、葡萄、棉花、麻、等の農產物、及、馬、牛、羊、雞の如き家畜に至るまで、人生に、最有用なるものは、重に、此の帶より出づ。人民は、おほむね、勤勉にして、夙に開化の域に進み、多く、精巧なる美術、工藝品を產出す。

第七課　中村直三

中村直三は、大和國山邊郡永原村の人なり。家貧にして、世々、夜廻を職としたりき。直三、

幼時より、心正しくて、大義に通じ、毅然としてたゆまざる風あり。つねに、勤儉を守り、嘗、鍛工を學びて、農具を製し、價を廉にしてひさぎけるに、次第に繁昌して、家産、やうやく起れり。

文久三年、伊勢錦（イセニシキ）といふ稲を試作せしに、收穫多かりしかば、同志と謀りて、その種、五十餘石を、各郡にわかちたり。

明治四年、郡山藩、老農を會して、諮問會を開

き、直三の、農事に精しきを聞きて、藩の農師とせんとす。直三、辭して曰はく、「我が家、父祖以來、永原村の恩を受けて、未報ゆること能はず。且、身、一藩に仕へなば、諸國の招に應じて、廣く、農桑の業を勸むること能はざらん」とて從はざりけり。

明治七年、奈良縣より、勸農事務を委ねらる。是より、一層精勵して、日夜、思慮をこらし、後來の國産たるべきものを、盛にせんとて、桑

苗、數萬本を、各郡にわかち、栽培の良法をも授けて、養蠶を勸めしかば、農事の面目、大に改れり。

同十年、內國勸業博覽會に、稻種を出品して、龍紋の賞牌を賜り、十四年には、多年、經驗せし稻種、七百餘種、綿種、二十七種を出品して、有功二等賞牌を賜れり。又、翌年、東京に開きし、米麥大豆烟草菜種共進會に、精選せる稻種を出品して、天覽を忝うし、御前にて、特

別名譽賞牌、及、金百圓を賜りしかば、直三、榮譽、身に餘り、感泣拜戴して、鄉里に歸り、農事に功ありし人々の祭典を行ひき。

直三が、老農の名高かりければ、招きて、農話を聽くもの多く、秋田、宮城、石川、大分等の諸縣、到る處、聽者、坐に滿ち、その說、大に、世に行はれたり。

直三、褒賞を受けしこと、前後、五十餘回。明治十五年八月、鄉里に歿す。享年、六十三。聞く者、

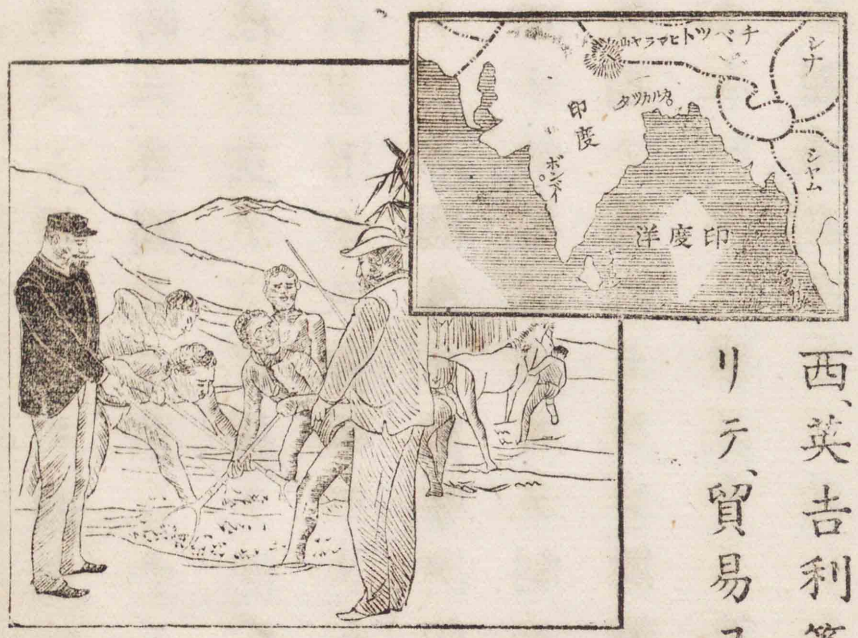
惜まざるはなかりき。

第八課　印度

印度ハ、氣候熱クシテ、地味肥エタレバ、米穀ノ如キハ、一年、三回ノ收穫アリ。此ノ外、棉花、鴉片、砂糖、茶、烟草、珈琲等ノ產出夥シ。

カヽル國ナルガ故ニ、夙ニ、人民繁殖シテ、現今ハ、二億六千萬ノ人口アリ。

今ヨリ、四百年前、葡萄牙ノヴァスコ、でガマトイフ者、始メテ、コノ國ニ入リ、後、和蘭、佛蘭



西、英吉利等ノ人、前後、相ツギ來リテ、貿易ヲ行ヘリ。時ニ、國內分裂シテ、互ニ、攻伐ヲ事トセシカバ、各國人ハ、之ニ乘ジテ、政治ニ干涉シ、百五十年前、佛蘭西人、獨、權勢ヲ張ラントシテ、諸侯ヲ助ケテ、國王

ヲ滅シ、新ニ、王ヲ擁立セリ。

時ニ、英國人、まどらすトイフ處ニ、東印度會社ヲ立テヽ、貿易ヲ行ヒシニ、其ノ中ニ、くらいぶトイフ青年アリ。土人ヲ訓練シテ、兵士トシ、佛國人ヲ破リテ、印度併領ノ基ヲ固メ、四十餘年前、諸侯ヲ制シテ、國王ヲ廢シ、遂ニ、英國ノ屬地トシテ、無限ノ富ヲ奪ヒタリ。

土人ハ、兵ヲ擧ゲテ、二年ノ間抗戰セシカドモ、團結ノ力乏シクシテ、全ク、英人ニ壓伏セラレ、終歲、苦役ニ服スルニ至レリ。彼ノ、がんじす河畔ノ、廣漠タル罌粟畑等ニハ、多クノ土人ノ、英人ニ監督セラレ、汗ニマミレテ勞働セルヲ見ル。眞ニ哀ナルハ、亡國ノ狀ナリ。

第九課　英吉利と獨逸

英吉利は、大西洋中の嶋國で、東は、一帶の海水を夾んで、近く、歐羅巴大陸を控へ、西は、大西洋を隔てゝ、遠く、亞米利加に對し、土地の廣さと、人口とは、殆、或が國と同樣である。

産物の多い中にも、最、鐵と石炭とに富み、その上、製造、貿易の業が盛大で、綿布の如きは、輸出額、全世界の製造高の半を占め、毛布、麻布、絹布、鐵器の製造も、之に次いで、最著名である。

首府倫敦は、テームス河ニ臨み、人口は、四百萬以上あって、歐洲第一の大都會である。河には、汽船の往來、織るが如く、陸には、鐵道、四方に通じ、王宮、議院、博物館、銀行、會社、諸工場等の宏壯なるものが、甚多い。

此の國の領地は、世界陸地の六分の一を占めて、印度、加奈太、濠太拉利、新西蘭（ニュージーランド）、喜望峰殖民地などが、重なものである。されば、英王の領地には、太陽の沒する時がない

といはれて、その富強、歐米列國中の第一である。

獨逸は、又、日耳曼(ゼルマン)ともいふ。巴威里(バヴァリヤ)、薩索尼(サキソニー)、烏爾丁堡(ウルテンブルグ)、巴丁(バーデン)等の二十餘國の聯邦で、普魯西(プロシヤ)國王が、盟主である。

首府伯林(ベルリン)は、百三十萬の人口を有して、歐洲第三の大都會である。市街は、整正で、家屋も、壯麗である。王宮、兵營、大學校、病院、劇場、旅館等の、建築偉大なるものが多く、教育は發達

し、學術は進歩して、伯林大學の如きは、世に聞えたる學校である。

此の國、もとは、隣國の墺地利(オーストリヤ)を、盟主として、相聯合してゐたが、二十餘年前、普魯西、代って、覇權をにぎり、尋いで、佛蘭西との戰に勝ち、國運勃興して、今日の有樣となったのである。

第十課　鑄物

鑄物は、我が國の美術工藝品中の一にして、

其の主要なるは、鍋、釜、火鉢の類を始として、花瓶、水盤、噴水器、大砲、銅像、鐘等の類なり。鑄物を造るに必要なるは、鑄型(イガタ)なり。鑄型には、蠟型、土型、木型、等の種類あり。蠟型は、床の置物など、小なるものを鑄るに用ゐ、土型、木型は、大なる銅像等を鑄るに用ゐる。

蠟型は、蜜蠟と、松脂(マツヤニ)とを混じて製し、木型は、木にて造り、土型は、粘土にて造るなり。

蠟型の上に、紙土(カミツチ)を塗り、玉土(タマツチ)をかけ、更に、壙(アナ)土(ツチ)をかけて、日に干し、燒窯に入れて燒けば、其の中の蠟は、自然に鎔け去りて、中空となるべし。之を、二つに割り、中子(ナカゴ)とて、砂土をねりたるものをつめ、これを取りて、日に干し、よく乾きたるとき、銅の入るべき程の厚さを削り去り、再、鑄型の中に入れ、針金にて留め置くなり。

大なる銅像などを鑄るには、先、木型の全體を、幾個にも分ち、一部分づゝに、前の如く、三

種の土を着け、後、つぎ合せて、全體を作るなり。之にも、中子を入るゝことは、前に同じ。

鑄型成れば、地に、穴を穿ちて据ゑつけ、青銅（カラカネ）、亞鉛、錫、鑄鐵等の鎔したるを注ぎ込みて、靜に冷し置き、後、鑄型をはづして、鑢（ヤスリ）を掛け、又、鑢の目を去り、磨きて、色着（イロツケ）をするなり。

鑄造術は、はやく、神代に行れたり。降りて、中古となりて、その術、大に進み、奈良の御世に鑄造せられし大佛の如きは、高さ、五丈餘に

達して、今、尚、壯觀を極む。

近世に及びては、此の術、愈盛にして、處々に、大なる製鐵所、造兵所、造船所、及、鑄鐵會社等興り、大砲、小銃、汽罐の類より、其の他、鐵器、銅器、銅像等を、盛に製造するに至れり。

文法　良行變格ノ有ハ、他ノ語ト結ビアヒテ、約リテ活クコトアリ。例ヘバ、至りてありノ、至れりトナリ、寒くありノ、寒かりトナリ、しかありノ、しかりトナルガ如シ。

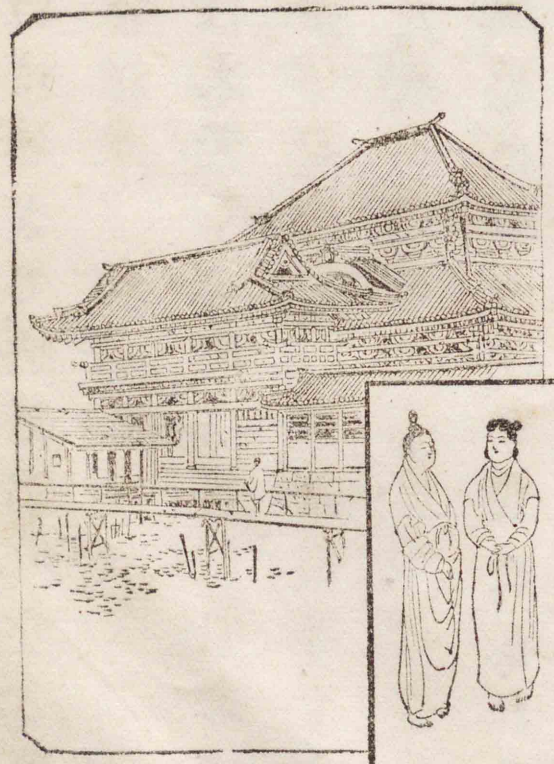
第十一課　奈良の朝

今より、凡千二百年前、元明天皇の御代に、都を、大和の奈良に遷させ給ひ、後、七代の間、こゝにまし〳〵き。之を、奈良の朝と稱す。

この朝には、文物、技藝、大に開け、學問も、著く進歩して、古事記、日本書紀等、貴重の歴史勅撰せられ、大伴家持（オホトモノヤカモチ）など、有名の歌人もあらはれたり。

此の時、武藏の秩父郡より、銅を上りしかば、始めて、銅錢を鑄造せしめられき。又、佛像の

鑄造、盛に行はれて、其の術、大に進みたり。宮殿の建築、壯嚴を極め、官廳邸宅、華美を盡しき。彼の、東大寺、法隆寺の如き大伽藍も、此の時に建立せられたるなり。



衣冠の制、亦、都雅に趣きて、綾羅錦繡などの織物、益、精巧となれり。

當時、韓、唐との往來繁く、音樂は、高麗樂(コマガク)、唐樂など行はれて、著く發達し、彫刻、繪畫等も、亦、大に進歩せり。凡、我が國の工藝、美術は、奈良の朝の頃より、漸、盛になりて、今日に至れるなり。

第十二課　陶器

陶器ハ、我ガ國ノ名産ニシテ、貿易品中、重要

ナルモノハ一ナリ。

之ヲ製スルニハ、陶土ヲ舂キテ、篩(フルヒ)ニ掛ケ、水ニテネリ、種々ノ形ニ作リテ、乾シ固メ、窯ニ入レテ燒ク。素燒ト稱スルモノ、是ナリ。

素燒ハ、上古ヨリ行ハレタリシヲ、奈良ノ朝ニ至リ、始メテ、釉藥(ウハグスリ)ヲ施シ、潤澤ニシテ、平滑ナルモノヲ造リ出ダセリ。

陶器ニ、繪畫ヲエガクニハ、先、顔料(エノグ)ヲ以テ、素燒ニ、花鳥山水等ヲエガキ、釉藥ヲカケテ燒

キ、或ハ、釉藥ヲカケテ燒キタル上ニヱガキテ、燒キツクルナリ。

又、長石ヲ粉末ニシ、ネリカタメテ燒キタルモノヲ、磁器トイフ。足利幕府ノ頃、祥瑞(ションズイ)五郎太夫トイフモノ、製シ始メタルニテ、肥前ノ唐津ニ傳ヘシガ、全國ニ弘マレルナリ。

陶器、磁器ノ外ニ、七寶燒トイフモノアリ。風雅ニシテ、釉畫、着色ノ艶麗ナルコト、寶玉ヲ集メテ作レルモノヽ如シ。コレ、銅器ノ上ニ、

金屬ヲ用ヰテ、種々ノ畫樣ヲヱガキ出ダシ、五彩ノ釉藥ニテ、其ノ隙ヲウヅメ、陶器ノ如ク燒キタルニテ、花瓶、香爐、盆、皿、鍾(コップヲ)、緒締(ジメ)、笄、指環等、優美ナル品多シ。

第十三課　加藤景正

加藤四郎左衛門景正は、鎌倉時代の人で、藤四郎とも申しました。幼い時から、土で、物を造ることを好み、成長の後、陶器を燒くわざを學びました。

その頃、支那は、製陶の術が進んでゐました
ので、藤四郎は、之を學ばうと志し、道元和尚
に隨行して、彼の國に渡り、六年の間修業し
て、技術を研究いたしました。
二十七歳の時、肥後の國川尻に歸つて、彼の
國から持ち歸つた土で、三つの壺を燒いて、
時の執權北條時頼と、道元和尚とに贈りま
した。
それより、備前の國を經て、山城に入り、畿内

の國々を巡つて、あまねく、陶土をさがしま
したが、心にかなふものが無かつた
ので、大に失望いたしま
した。
後、尾張の國に入
り、東春日井郡瀬
戸村で、始めて、持
ち歸つた土と等
しいものを發見

し、大に喜んで、直に、窯を開きました。これが、此の地に、陶業の起った初でございます。世間で、陶器を、瀬戸物といふは、この地の名によったのでございます。

景正の子孫は、代々、業を繼いで、今も、瀬戸村に、加藤となのるものが、澤山あります。村内、七百餘戸、皆、同業で、窯元といって、燒窯の有る家が、百五十餘もございます。

第十四課　心身の休養

昨日は、我が家の井戸ざらひにて、幸に、學校の休日なりければ、早朝より、人々と共に立ち働きけるに、夕には、氣さわやかにして、食物の味も、殊に旨きを覺えたり。

我が師は、嘗訓へたまはく、常に、心を勞する者、たまく、閑を得て、身體を働かしむれば、甚、愉快を覺ゆるものにて、衛生の上にかくべからざることなりと。

さればにや。父の書齋には、晴耕雨讀の四字

を記せる扁額を掲げたり。父は、常に、讀書と勞働とを兼ね勤め給ひて、いさゝかも、健康を害ひ給ひしことなし。

之を思へば、數日の間刻苦して、非常に勉強すとも、健康を害し、或は、倦怠の念を生じて、業を廢することなどあらば、前に勉強せし效なからん。されば、常に、心神と、身體とを、こもゝ養はんこと肝要なるべし。

第十五課　夏の樂

夏も、やう〳〵深くなり、木として、繁らざるはなく、草として、榮えざるはなし。緑のいろ深き夏木立は、げに、春の花にも劣らざるなかめなり。

春の花は、ところ〴〵に咲きて、稀なれど、夏は、山も、里も、ありとある草木、おしなべて、緑の色ならぬはなし。

植ゑ集めたる庭前の草木は、露を帶びて、處得がほに生ひ茂りたり。

夜は、螢の、水のほとりに飛びかふさまなど、いとおもしろし。

青みわたれる夏山のけしき、高き峰の、大空につらなりて、雲の外に聳えたるを、飽くまで見るこそ、殊にこゝろよきながめなれ。みな月のころとなれば、風も、やう〳〵したしまれて、端居するも、いとこゝろよし。

池の蓮葉の、濁にしまずして、夕風ににほひわたるさまは、他の草にもすぐれたり。殊に、

花の、開きたるは、あたりにかをり満ちて、世に似るものもなく、清らかなり。涼を逐ひて、樹陰にいこひ、木の下風のなつかしきに、清き泉を

むすびて、夏を忘るゝ心地するも、いさぎよし。

光あきらけき、夜半の月を、清き水にやどして見るは、更なり。流るゝ水の音など聽けば、心も清らかなり。

日頃經て、暑さ堪へ難き時、にはかに、夕立して、名殘涼しきも、いと心地よし。

（樂訓參照）

文法　形容詞ニモ、語尾ノ變化アリテ、く、し、きト活用ス。深く、親しくトイフ詞ノ、深く、深し、深き、親しく、親し、親しきトナルガ如シ。

第十六課　沙原の旅

出羽の國酒田を、朝、とく立ちいでゝ、吹浦（フクウラ）といふ里を心ざして行く。其の間、六里にして、路傍には、人家もなく、又、田畑も見えず。左は、大海、右は、鳥海山にて、過ぐる處は、渺々たる沙場なれば、道路も明らかならず。三五十間程づつに、柱を建てゝ、めじるしとせり。酒田より、一二里も來たりと思ふ程より、北風、強く吹き起りて、沙の飛び散ること夥し。

初の程は、彼のめじるしをたよりとし、又は、人馬の足跡、草鞋、馬の沓などのある方へと、道を急ぎしに、次第に、風吹きつのりて、沙をまき揚げ、天地も、眞黑になり、目當の柱の見えざるのみか。我が後に從へる人すら見えわかねば、互に、聲を合せ、手を携へて行く程に、後には、前後をも辨へず。もとより、路を尋ぬべき人も無く、心惑ひて、せん方もなし。かく、みだりに行き迷ひなば、いかなる處に

さまよひ到らんとも圖りがたしと、心をしづめ、沙上に安座して、風沙のをさまるまでは、いつまでなりとも、此の處を動くまじなどいひたれども、夜にも入りなば、いかゞはせんと思ひめぐらせば、更に、心も安からず。とやせん、かくやあらんとたゞずみ居たるに、午過ぐる頃より、小雨降り出でたり。雨のしめりに、沙しづまり、めじるしの柱も見え出でゝ、うれしきこと、限無し。

されども、風、尚やまざれば、雨は、横さまに降り、笠は、何方ともなく吹き飛ばされ、合羽は、頭より上に舞ひ上り、惣身、ぬれにぬれて、憂くつらきこと、言ひ盡すべからず。されど、沙しづまりしゆゑに、路にも迷はず。急ぎに急ぐ程に、申の刻ばかりに、吹浦に着きぬ。

總じて、越後、出羽は、街道、北海にそひたれば、一日も、沙原を通らざることなし。歩行するにも、足首までは、常に、沙に埋れ、進めども、只、

退く樣にのみ思はれぬ。殊に、九月の頃より、三月の末までは、日として、風吹かざることなく、沙塵、常に、天を覆ふ。又、風の吹き散す沙は、ふきまはしによりて、處々にたまり、或は、堤の如く、或は、塚の如くになりて、其の形、日々に變りゆくなり。其の上、かゝる沙原にては、夏の熱さ、やくがの如く、秋の末より、春までは、草木、悉枯れ死して、たゞ、白草の、風に動くを見るのみ。

（東遊記參照）

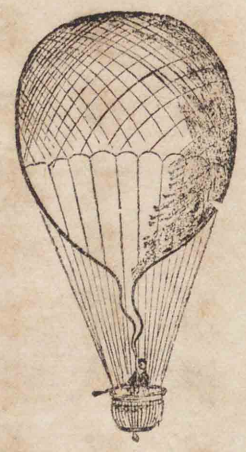
第十七課　空氣ト水

空氣ト、水トハ、色ナク、香ナク、淡泊無味ノモノニテ、共ニ、人生トノ關係、甚大ナリ。

カノ、洪水暴風ノ災害モ、畢竟、空氣ト水トノ作用ニ外ナラズ。然レドモ、吾等人類ヨリ、鳥獸、草木ニ至ルマデ、兩者ナクテハ、一日モ、生ヲ保ツコト能ハザルナリ。

汪洋タル海洋ハ、船舶ノ來往ニ便シ、魚介海藻等、衆人ノ獲取スルニ任セテ、無盡ノ寶藏

タリ。滾々タル河流、氾濫タル湖水ハ、或ハ、灌漑ニ利シ、或ハ、運輸ニ便シ、或ハ、工業ニ資ス。



又、水ハ、太陽ノ熱ヲ受ケテハ、蒸氣トナリテ、中天ニ昇リ、晝間、日光直射シテ、堪ヘ難キ酷暑トナルヲ防ギ、夜間、地熱發散シテ、俄ニ、寒冷ニ變ズルヲ防グ。凝リテ、

雲トナリテハ、奇峰ヲ、炎天ニ峙テ、雨トナリテハ、下界ノ塵埃ヲ洗フ。草頭ノ露、秋林ノ霜、三冬ノ銀世界、陽春ノ煙霞等、四時ノ光景ヲ新ニスルモ、亦、皆、水ノタマモノナリ。

空氣モ、亦、偉大ノ效用アル者ナリ。日光ヲ反射シ、或ハ屈折シテ、四方ニ擴散シ、樹陰、室内ノ如キ、光線ノ直射ヲ受ケザル處ニモ、光明ヲ保チテ、日中、燭ヲトル不便ナカラシム。又、風トナリテハ、塵埃ノ混合セル空氣ヲ驅逐

シテ、人ノ健康ニ適セシメ、殊ニ、貿易風トナリテ、遠洋ノ航行ヲ容易ナラシム。

抑、空氣ノ容積ハ、水ニ比スレバ、遥ニ廣大ナルモノナレバ、モシ、之ヲ利用センニハ、人世ヲ益スルコト、更ニ大ナルベキナリ。近時、歐米諸國ニテハ、輕氣球ヲ改造シテ、風ノ有無ニ關セズ、空中ヲ飛行スルコト、猶、船舶ノ、海洋ヲ航スルガゴトクナラシメントテ、之ヲ研究スルモノ多シ。

第十八課　資本

拜啓經濟の大意御教示に預り資本は儲蓄の結果と申すことを了解仕りありがたく存じ奉り候尚資本に就きて詳細の御教授を蒙り度懇願奉り候頓首

返事

拝復凡商工業者は家屋を設け器械を据付け諸道具をも取揃へ金錢商品等を備へ置くこと必要に候

この家屋器械類はおすわりのもの故固定資本と申し金錢商品は出入常なきもの故に流通資本と申し候

この流通資本の運轉は譬へば壹千圓の資本にて貨物を買入れ二ヶ月毎に賣り盡して年に六度の仕入を致候はゞ壹千圓の資本にて一ヶ年六千圓の取引をせし譯と相成り上手に致し候はゞその都度多少の利潤を得べくこれを資本の中に加へ益資本

を殖し候はゞ實は一ヶ年六千圓以上の取引と相成るべく候

又商人は自家所有の資本のみにては大なる取引は致難く候信用之あり候はゞ他人の資本を流通しまたは元方より掛買を致し賣上にて支拂をすること出来申し候又平生取引多き間には交互計算と申して期限を定めて取引計算を致すことも之あり候故に信用は亦一種の資本とも申すべく候先は大略斯の如くに候不宣

第十九課　銀行

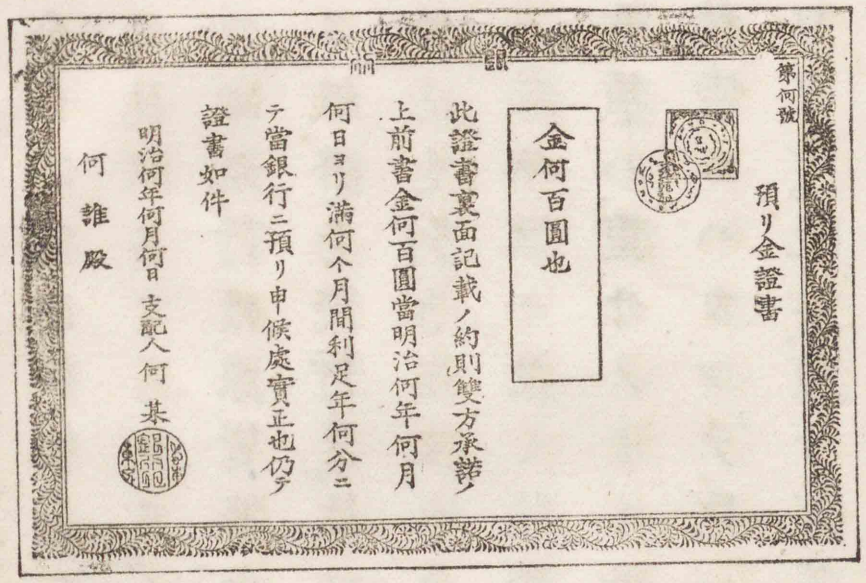
金錢は、流通を主とするものなれば、徒に、家に藏めんよりは、資本を要する者に貸して、利殖を圖り、自他を益すべきなり。停滯せる金錢を集めて之を貸し付け、世間の金融を助くるは、即、銀行の要務なり。

銀行は、平生、他より、金錢を預りて、利息を支拂ふ。預金には、定期預、當座預、特別預等の區

別あり。

又、爲替をも取り扱ふ。この爲替は、郵便爲替の如く、金額を制限せず、各地の同業者間に取組の規約を設けて取り扱ふなり。

又、約束手形、爲替手形の割引を行ふ。例へば、甲、三个月の後に、乙より受け取るべき金錢ありて、其の手形を所持し、さし當りて、金錢の必要起りたるに、銀行に到りて、手形を、現金と引き換へんことを求むれば、銀行は、三



第何號

預り金證書

金何百圓也

此證書裏面記載ノ約則雙方承諾ス

上前書金何百圓當明治何年何月何日ヨリ滿何个月間利足年何分ニテ當銀行ニ預リ申候處實正也仍テ證書如件

明治何年何月何日　支配人何　某

何　誰　殿

个月分の利息を引き去りて、殘金を、甲に仕拂ひ置き、期に及びて、乙より、券面の正金を受け取るなり。之を、手形の割引といふ。

此の外、荷爲替とて、銀行は、甲より、乙に送るべき荷物を預りて、代

金を仕拂ひ、荷物を、乙に送りて、其の代金を受け取ることあり。

日本銀行は、豫、貨幣を備へ置きて、之に對する紙幣を發行す。故に、何時にても、正金と紙幣とを引き換ふべき義務あるなり。

第二十課　晴雨計

空氣ハ、重サノナイ物ノヨーニ思ハレルガ、精密ニハカッテ見レバ、重サノアルコトガワカル。既ニ、重サガアレバ、亦、物ヲ壓スカガ

アル。之ヲ、空氣ノ壓力、又ハ、略シテ、氣壓トモイフノデアル。

氣壓ヲ驗スルニハ、長サ三尺許ノ硝子管ノ、一端ハ塞リ、他ノ一端ハ開イテヰルモノニ、水銀ヲ充シ、其ノ口ヲ、指ニテ塞ギ、之ヲ、倒ニシテ、別ニ、水銀ヲ盛ッテアル鉢ノ中ニ立テ、管口ノ指ヲ放テバ、管中ノ水銀ハ、降ッテ、高サ二尺五寸バカリノ處デ止ルモノデアル。

コレハ、管外ノ空氣ガ、鉢ノ中ノ水銀面ヲ壓

シテ、管内ノ水銀ヲ支フルカラデアル。サテ此ノ二尺五寸バカリノ水銀柱ノ重サハ、氣壓ト、正ニ、相平均スルニヨッテ、モシ、氣壓ガ、常ニ、一定シテ、コレヨリ増減スルコトガナカッタナラバ、水銀モ、同ジ高サニアッテ、變ズルコトハナイデアラウ。

シカシ、氣壓ハ、時々變ズルモノデ、其ノ壓力ガ増ス時ハ、管中ノ水銀ハ、壓シ上ゲラレ、壓力ガ減ズル時ハ、水銀ハ下降スルモノデアル。故ニ、此ノ水銀ノ昇降ヲ見テ、容易ニ、氣壓ノ増減ヲ測知スルコトガデキル。

此ノ水銀ノ昇ルノハ、晴天ノ前兆デ、降ルノハ、風雨ノ前兆デアル。又、急ニ降ル時ハ、暴風雨ノ徴デアル。

晴雨計ハ、此ノ水銀柱ノ裝置ヲ、完全ニシ、精密ナル度目ヲ盛ッテ、晴雨ヲ豫測スルニ用ヰルモノデアル。

文法　助動詞ニモ、活用アリ。る、らる、しむ、す、及、つ、

ぬ等ハ、動詞下二段ノ活用ニ同ジク、なり、たり、けり等ハ、良行變格ノ活用ニ同ジク、べし、まじ、如し等ハ、形容詞ノ活用ニ同ジ。

第二十一課　橋本五郎右衛門

橋本五郎右衛門は、豐後の大分の商人なり。年二十七八の頃、兄八郎右衛門の爲に、商用を帶びて、薩摩、大隅の邊をめぐりし時、美麗にして良好なる草莚を見、その、琉球の國産なることを聞きて、之を移植して、大に、物産

を興さんと思ひ立ち、兄と謀りて、遂に、琉球に渡らんとせり。時に、寛文三年なり。

五郎右衛門、鹿兒嶋より、船に乗りて航行すること、凡、三百里ばかりにして、俄に、暴風に遇ひ、辛うじて、一の小嶋に漂

着せり。さて、人家のある處に到れば、圖らず、三人の男女に逢へり。服裝、異樣にして、言語通ぜず。庭前を見れば、多く、藺草を積み上げたり。五郎右衛門、大に喜び、その苗を得んことを請へども、頑然として肯はざるさまなりければ、之を傳ふるは、國禁ならんと思ひて、一計を案出し、竹竿の節を貫きて、藺を、其の中に密藏し、杖として携へ歸れり。

かくて、之を植ゑしに、培養の方法と、地質の適否とを知らざりしかば、悉枯れて、一莖をも殘さゞるに至れり。よりて、再、かの嶋に渡り、數月の閒滯在して、遂に、嶋人と親み、熟練なる培養者一人を伴ひ、苗を持ち歸りて植ゑつけしに、生育、頗好くして、次第に蕃殖せしかば、織りて、莚とし、七嶋莚と稱せり。

兄八郎右衛門は、大阪に到り、江嶋市兵衛と約束して、七嶋莚の問屋とし、盛に、之を賣らしめしかば、終に、豐後の名產となれり。

第二十二課　海上の事業

我が國は、數多の嶋より成れるが故に、海に賴ること、甚多し。隨ひて、船を要すること、極めて多く、船舶の數、凡、六十萬あり。之を製造するには、所々に、造船所を設けたり。

船を操縱せんには、修練を要す。まして、帆前船、蒸氣船に乘じて、萬里の波濤を凌がんには、之に應ずる智識を具へざるべからず。此等の海員を養はんが爲に、各地に、商船學校

の設あり。

航海、碇泊の爲には、海圖を製して、海岸の形狀、海底の淺深、暗礁の位置を詳にし、燈臺、浮標を設けて、航路の目標とし、日々、氣象を豫報して、難船の患なからしめ、海上保險、水難救濟等の設ありて、萬一の變に備へたり。

近來、交通の業開けてよりは、獨、國内のみならず、東は、亞米利加、北は、露西亞、西は、朝鮮、支那、印度、歐羅巴、南は、濠洲に至るまで、航路、悉

通じ、往來頻繁となれり。

漁業、採藻に從事する者も、亦多く、遠洋に航して、鯨獵、臘虎獵等を業とする者、其の數、益增加するに至れり。

我が國海上の事業は、近年、かく、著く進歩したれば、堅牢なる軍艦、常に、近海を巡航して、之を保護せり。

第二十三課　濱田彌兵衞

濱田彌兵衞は、肥前國長崎の人なり。嘗、商船

に乘りて、屢、南洋諸嶋に往來し、よく、諸國の語に通じ、又、其の事情にも明なりき。

寛永年中、長崎の代官末次平藏の商船、印度に往かんとして、臺灣を過ぎしに、居留の和蘭人等襲ひ來て、悉、其の貨物を奪ひ去れり。平藏聞きて、大に怒り、『是、實に、我が國の恥なり。必報いざるべからず』とて、彌兵衞を招きて、之を謀れり。彌兵衞、すなはち、弟小左衞門、子新藏と共に、部下百餘人を率ゐ、農夫の裝

をして、臺灣に渡り、移住の民と稱して、港の守吏に、上陸を許されんことを請へり。

守吏、之を、長官に告げしに、長官疑ひて、船中を檢せしめ、終に、上陸を許したり。彌兵衛等、城に入り、長官に見えて、留住せんことを請ひしかども、許されざりき。

かくて、數月の間滯留せしが、一日、早朝、彌兵衛、衆を率ゐて、城に至り、子弟兩人と共に、直に、寢室に入りて、長官を捕へ、短刀を喉に擬

して、前の無禮を責めたり。

蘭人等驚き騷ぎて馳せ集り、長官を救はんとしけるに、小左衛門、新藏の二人、刀を拔きて、之を遮り、眼をいからして叱しければ、皆恐れ

て近づくことを得ざりき。

長官、愈恐れて、頻に、哀を乞ひければ、彌兵衛、之を許して、先、城兵の發砲するを停めしめ、さきに掠めし貨物を二倍して贖はしめんとせしに、長官、謹みて、命に從へり。

彌兵衛、又、長官をも伴ひ歸らんとせしに、情をのべて、哀を乞ひければ、之を赦し、其の子を質として携へ歸れり。平藏、大に喜び、幕府に請ひて、厚く、彌兵衛の功を賞したりき。是

より、彌兵衛の名、海外に震へり。

第二十四課　我ガ國ノ武威

我ガ國ハ、古ヨリ、尚武ノ俗ニシテ、上ニハ、萬世一系ノ聖皇、稜威ヲカゞヤカシ給ヒ、下ニハ、同胞一體ノ臣民、義勇ヲ以テ、君國ヲ守レリ。

素盞嗚尊ハ、十握(ツカ)ノ劍ヲ以テ、暴ヲ誅シ、神武天皇ハ、フツノミタマノ劍ヲ以テ、國ヲ定メ給ヒキ。崇神天皇ノ御代、任那(ミマナ)ノ國ハ、招カ

ザルニ、德化ヲシタヒテ來貢シ、神功皇后ハ、將士ヲ率ヰテ、三韓ヲ平ゲ、府ヲ置キテ、之ヲ統治シ給ヘリ。

齊明天皇ノ御時、阿部比羅夫、東夷ヲ巡撫シ、後方羊蹄ノ地ニ、政廳ヲ立テ、肅愼ヲ征伐ス。

後一條天皇ノ御時、女眞國西海ニ來寇セシヲ擊チ退ケ、『後宇多天皇ノ御代ニハ、蒙古十萬ノ兵ヲミナゴロシニセリ。

後陽成天皇ノ御時、豐臣秀吉、朝鮮ヲ征伐シテ、明國ヲモオソレシメ、其ノ後、山田長政、濱田彌兵衞ノ如キ、一箇人ノ身ヲ以テ、尚、ヨク、國威ヲ擧ゲタリキ。近ク、征清ノ役ニハ、連戰、皆勝チ、向フ所、風靡セザルハナク、遂ニ、大捷ヲ得タリ。

古來、我ガ國、威武ノ隆ナルコト、實ニ、此ノ如シ。我等ハ、益奮ヒテ、祖先ノ武名ヲオトサヾランコトヲ期シ、益進ミテ、國威ヲ、宇內萬邦ニ輝サンコトヲ勉ムベキナリ。

文法　挙げたりきノきハ、き、し、しかト活用シ、運さんノんハ、正シクハ、むトイヒテ、む、めト活用ス。又、ずトイフ助動詞ハ、ず、ぬ、ねト活用スルナリ。

第二十五課　み國のはしら

後鳥羽天皇御製

夜を寒み
　ねやのふすまのさゆるにも
　わらやの風をおもひこそやれ

筑波山このもかのもに影はあれど
　君がみかげにますかげはなし
（よみ人しらず）

人の子のおやになりてぞわが親の
　おもひはいとゞ思ひしらるゝ
（康資王の母）

あめつちの神のかためし皇國とて
　をかしはてたるえみしをも見ず
（源　基綱）

きみのためたみのためぞと思はずば
雪もほたるもなにかあつめん
（藤原師綖）

高等小學國語讀本五終

明治三十二年十一月一日印刷
明治三十二年十一月五日發行
明治三十三年一月一日訂正再版印刷
明治三十三年一月四日訂正再版發行
明治三十三年十二月十二日修正三版印刷
明治三十三年十二月十五日修正三版發行
明治三十四年三月二十日修正四版印刷
明治三十四年三月廿四日修正四版發行
明治三十四年九月五日修正五版印刷
明治三十四年八月八日修正五版發行

定價			
卷ノ一 金貳拾錢	卷ノ二 金貳拾錢	卷ノ三 金貳拾壹錢	卷ノ四 金貳拾壹錢
卷ノ五 金貳拾貳錢	卷ノ六 金貳拾貳錢	卷ノ七 金貳拾貳錢	卷ノ八 金貳拾貳錢
全八冊 金壹圓七拾錢			

（高等小學國語讀本奥附）

編者　西澤之助　東京市京橋區築地二丁目十一番地

發行者　株式會社國光社　東京市京橋區築地二丁目十一番地

右代表者　橋本忠次郎　東京市京橋區築地二丁目十一番地

印刷者　河本龜之助　東京市京橋區築地一丁目十八番地

著作權所有